

木曾十一宿

熱 賀川 (にえかわ) 奈良井 藪原 宮越 福島 上松
頻原 野尻 三留野 (みどの) 妻籠 (つまご) 馬籠

奈良井 ————— 島居峠 1197

福島

碓氷・新居・箱根

天下の四大関所

関所跡 国道の山手に廃道となった旧中仙道の一部
幅 三メートル弱

うしろは山、前は崖ぶち ← 関所の地理的条件可。

・関所前 寛文ごろつくられたという並石が一部残っているのみ。

関守 木曾の代官 山村氏

山村氏

この地の大名家 木曾義昌の家臣であったが関が原役
に山村道祐 (甚兵衛) が家康に従って木曾鎮定に
功を立て、尾張藩に付属して木曾代官となり
福島宿に居館も設けた。

木曾の木材

江戸時代初期の城郭建築ブーム

・木曾の五木

松、榎 (いかり) 明松 (あすなろ)

榎 (まき) 榎 (ゆず)

・中乗りさん

筏下し

・尾張藩 ドル箱

上松

木曾木材集散地

年向十万吨 (民・官材合せ)

木曾駒

- 山坂に適している。
- いさこが石ころの坂道を歩いても疲れない丈夫な足腰
→「めんこい」感じ
- 娘さんなどがひいておくのにちょうどよい馬で、義仲のような精悍な男や巴のような大それた大それたには小こめくない。
- もともと義仲が川乗して馬駆、都を蹂躪したのにはこの馬でない
- 特産馬として有名になりはじめたのは戦国末が
- 需要がさかんになったのは江戸中期
- いまでも木曾福島には馬のせり市が立っが、これは近世はじめの慶長ごろに用かかれたもの。

万松寺興禅寺

- 妙心寺派
- 閑所と向いあう。
- 山村家の菩提所であり境内に木曾義仲の墓
- ~~境内~~ 山門にあたるのを勅旨門という。
源行家が以仁王の旨を奉じて義仲にそれを伝えたとする、ゆかりをもっている。
- 平安末期の建造という伝えをもっているが昭和のはじめ火災で焼失し最近復興
- この寺は室町の中興、義仲十二代の子孫と伝える木曾信通が義仲の菩提を弔うために開基したという由緒をもっている。
義仲が信仰したという観音様を収めた観音堂は室町末に十元代木曾義元によって境内に建てられた。
- 江戸時代、七月の十四・十五の酉日、つまりお盆の日には二どは松明(なまつ)祭と風流(ふうりゅう)踊りが行われた。
これは信通が義仲の倶利伽羅(くりにがら)峠の戦勝を記念してはじめたもので、数百人の武者を寺の南テ正面の烽火山頂にならばせ、めいめいに大きな松明をせおかせ、剣戟甲冑を帯びて旗を立て、鉦太鼓を鳴らして凱歌をかなでつ、いっせいに山を下らせ、その松明のあかりのもとで里人を踊らせる。 — という

趣向であった。この風習は明治初年まで続けられた。
この踊りがいまの木曾踊りの原型なそうである。
木曾節もそれととみに生まれた。

木曾節のも 宗教的な意味

木曾のな……

なまのりさーん

木曾の御岳

ナンチャウホイ

夏でも寒い

ヨイヨイヨイ

^{あかし}裕な……

なまのりさーん

裕やりたや

^{なま}ナンチャウホイ

足袋 ~~な~~ まええて

ヨイヨイヨイ

わたしな……

なまのりさん。

わたし ~~お~~ さん

ナンチャウホイ

一重のさくら

ハ重にな……

ハ重に咲く気は

さうにない

木曾のな……

木曾の ^み 深 _い に

^き 伐る木は ^み あかい

思 _い なる……

思 _い なる気は

さうにない

※ 「ナンチャウホイ」とは「ナムチャウホイン」で南無観音に
帰依するといふぐういの意味である。…住職のはなし。

境内の義仲の墓は彼が栗津の原で巴に托した遺髪を埋めた
ものなそうた。義仲の首塚は京都東山の永田善一郎氏邸。

「洞」は近江の義仲寺(まがらひ)

土蔵 _山。

手のうしろ

義仲の城あと

城山

- 福島宿が眼下におさまられ、そのむこうに重層する山々のうしろに木曾駒の高峯が、右手には台が峯という高い山、武田氏が織田軍追攻にそなえた烽火台(のび)がおかれらる。
- この山には精力剤の「いかり草」(淫羊藿)が多い根を煎じるのだそう。ちょっとツバに似た可憐な草で

上田郡落

福島宿から 木曾川にそって 2km.

このはずれが義仲を育てた中原兼遠の邸跡。義仲は二才のとき父義賢(はかた)と頼朝の兄の悪源太義平に殺された。兼遠は乳母の夫であつたが義仲をいたいて木曾にのがれた。

兼遠の二人の子が、根井(ねい)行親、榎親忠となつて木曾の四天王とその勇名をうたふれた。榎口兼光と今井兼平である。巴御前は其の妹で義仲は彼らと兄弟のように育てられた。

中央線と木曾川にはさまれた田圃の中に兼遠の記念塚がぽつんと立てられている。そのむこうの丘が城跡であらう。

塚の近くに一軒の農家がある。中原家の子孫でいまは「此尻(このしり)」という姓である。むかし代官が中原の館跡はどなたとをくので「この尻の方です」とこたえていううちに此尻とつけられたそうだ。おじいさんの話。

「このすその方」というのを「この尻の方」という。この地帯は、このおじいさんの名がとれた。

義仲をめぐる女性として巴をはじめ、頼兵衛、とほあおの山吹・葵などの勇婦が平家物語や源平盛衰記に出てくる。だが確かな史料では彼らの実在をつきとめない。

日義村.

上田の東の方で駒ヶ岳山麓の登山道である。
疎林の中を小川が流れる。

しばらく行くと大原に出る。広い芝原に白樺が
たわび、そのむこうに林がつつく。

このあたりキャンプ場 ちゃんと軽井沢を思わせる。

木曾駒ヶ岳山頂まで 往路 7時間
復路 5"

大原から西をみると御岳山が全貌をあらわす

木曾の棧^{かけはし}.

福島 — 上松

左手の崖の上を中央線が走ってトンネルに入る。その逆の
はしに芭蕉の句石碑がある。

木曾の棧とは木曾路の難路を象徴する言葉で
ある。このあたりいまはさほどの難所とは思えないが、
奈良時代に、はじめて吉蘇(きそ)路が開かれて木曾川
のべりに棧道(さんどう)がつくられたころは、おそろしく名だたる
険阻な道であったものと思われ。

道は悪いか、その埋めあわせであるがのうに、午後のはじめ
陽ざしに輝く山峡の風景はすばらしい。

松皮葺の上を石でおおえた農家の屋根が斜光に
光輝く。納屋のかたわらの水車が眠るげに回る。
軒と通いっぱいに張り出した家なみの続く美しい床場
のふり取。白い石をあらわに出した木曾の川原、
山かげから急に姿をあらわす青い淵。
谷底の寺の屋根の傾斜。そのかなたの激流。
岩にくたけるしずさ。

寢覚の床

上松から南に一キロ半
街通に多高いソバ屋がある。
川柳にも。

寢覚のそばを夢で食う張男れ。
そば俵つけて寢の虎牛。

臨川寺

このソバ屋の横手も数丁ほど下ると臨川寺という
禪寺がある。

この境内から眼下に寢覚の床が見渡せる。

境内からさうに下ると中央線の線路を渡って川岸に出る。
浦島太郎が釣をした。ヒルネをしたという大岩を中心
に、いくたの奇岩怪岩がなずび、濃紺緑に淀んだ淵
がある。この潭底が竜宮への通路といわれている。

潭

臨川寺の境内に「明治天皇小休憩所」という立札が
ある。

騎兵のかかげる錦旗を先頭に天皇が巡幸して来た
のは明治十三年

明治の前年、天皇はほとんど全国をくまなく歩いた。
明治政府のくめだてた天皇制PR.のためである
ことはいうまでもない。

山村代官と巴御前と浦島太郎は知っているが
天皇といえは、義仲より弱いぐらいの知識でいどの
土地だから巡幸も必要ならなかったらう。

馬籠.

木曾十一宿のいちばん南のはずれ、
信濃と美濃の国境の村。

馬 籠 (らまじ)

蘭 川 (あづまがわ) のほとり

いじんまりとした 一すじの宿場町。

飯田行きのバスが日に何回かと本枝や炭もつトラックが
通るのみ。

立派な 卯建 (うたつ) を構えた1回本陣は いまでは
宮林署の分室。

蘭 川 を渡って 大平街道 を渡る。

山道に回りくわった山道になる

左手は谷川である。信濃路はいたるところうねうねが
こも 野菊と名も知らぬ草花の道。

峠を越えたと「峠」という部落がある。

やがてかい小谷の恵那川が前方に姿を現わす。

ここから石ころ道の下り坂で馬籠の部落に入る。

ここも坂道 一すじのさびしい宿場である。

藤 村 ふるさと 大正九年

灯辺 権興

合併

これは現実のきびしい問題である。馬籠の風光は美しい
藤村は存名である。そして郷土の誇りでもある。
しかし風光と藤村では村人たちは食っていかれない。
中津川市に入ったデが地理的にも、そして経済的にも
行政の上でもなにかと便利である。もっと大まかにいえば
岐阜とこえて、躍進する名古屋の経済圏の波が、この山里に
まびたひたひたと押しよせているのである。わたしは議論が合併が
どちらがよいと結論を下しているのではない。時代の流れと
山里の人の生活のきびしさを感じているのである。

昔ながらの馬籠の風趣はなにかと捨てがたいもの
がある。もとのままであってほしい。しかしそれは往々として、外
来者の、詩人や文人や、史家たちの無責任な考へである。
そんなによければ、馬籠でさびしい生活も一生暮ら
してみるといわれるら、ほとんど誰もが危ぶみすぎるであらう。
なによりも藤村自身はここに住まなかつた。

てびたものは懐かし、失われゆくものには憂惜の情がのび、
これは人間の当然の感懐である。しかしわたしたちは古きもの
を懐かしみ、惜しむとともに、もうひとつ考えてみなければなら
ぬ問題があると思うのである。

わたしの信濃路 木曽路の結論の一つはこれであつた。

馬籠の旧宿場に引かれつづけて坂を下ると荒町の部落
に入る。上り下りの多りせまい中仙道の旧道である。

坂道のせいか石だらけで数いりあり、人家がとたえちとこ
ろは草にうばわれている。信濃と木曽の境の峠に一軒の農家
がある。もと茶屋だったそうである。家のまゝに。

おくられつ おくりつ果は木曽の秋
という芭蕉の句碑があり。また藤村の筆になる。

「是より北 木曽路」という新しい碑が立てられている。
道はすっかり農家の庭になって、鶏があそんでいる。

茶屋の横から、峠の下に落合宿の町並みが秋の
陽にかすみ、はるかかなたの恵那山のすそに映（た）は
いに木曽川が流れていた。

ここが旧中仙道は完全な廃道となる。

信濃路の果てである。

「木曽・信濃路の魅力」原田伴彦より

白雲丹青葉若菜の三十匹

正圓子規

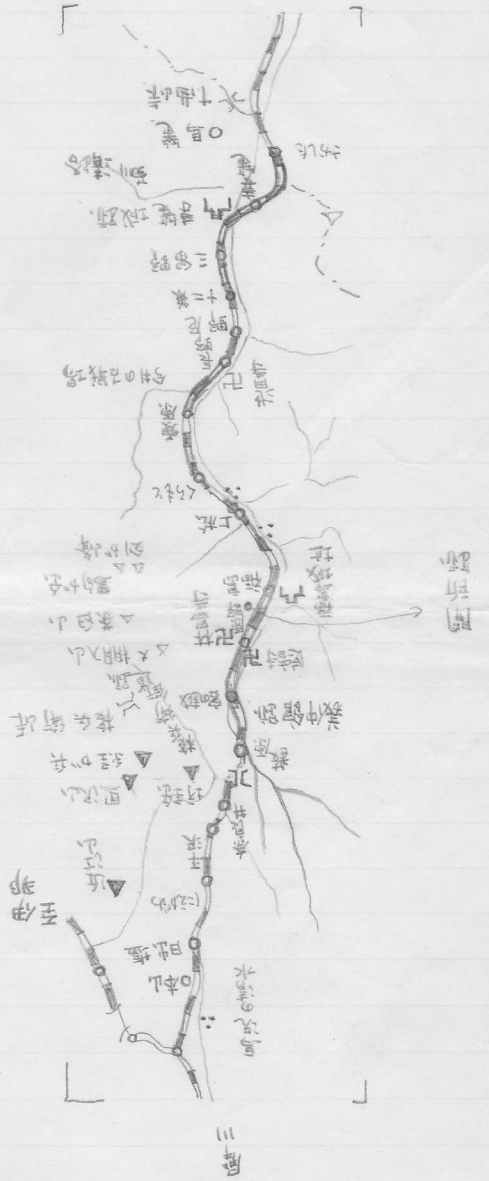
長野県南部 西部/中部

東の杉原から西の十曲峠まで十一宿と、
木曾街道をいった。
22里余

22 金

015 和銅年閏

信濃と美濃の境に古蘇路が走っていた



木曾氏

清和源氏の支流で、六条判官源為義の次男義賢より出ている。義賢の次男が義仲で、頼朝のイトコにあたる。幼名を駒王丸といたが、二歳の秋(久寿二年)父の義賢はオイの悪源太義平に殺された。当時、駒王丸は武州多胡の館にいたので、義平は家人の畠山重能に駒王丸の殺害を命じた。しかし重能は幼ない駒王丸を殺すにしのびず、斎藤朝実盛に駒王丸の身を託した。そこで実盛は、駒王丸の乳母の夫で木曾谷の豪族中原兼遠にひそかにあずけることにした。

山の奥なる山の里、雲をふみ、霞をわけ、艱難辛苦(にほをか)されて、母にたかれ、木曾山中の宮ノ越に逃げたのである。

仁安三年(1168) 15歳の春、元服して木曾次郎義仲と名づけた。この年の秋、母の小枝御前が病没したので、義仲は休養のために館の北の山にまわに寺をたて、地名をわけて榎(栢)原寺にまんだ。これが宮ノ越に現在も残る。義仲の菩提所徳壽寺の前身。

治承四年(1180)の春

27歳

四皇子

以仁王の令旨によって北陸官(高倉帝第~~第~~)を奉じ、騎る平家を討ち、世を平和にかなさんとて、を念じ館の一段に記する八幡官の境内で夜上り。

兼遠の子 榎口兼光、今井兼平兄弟をはじめ、信濃源氏のつわものが集まる、千余騎。

義仲 進撃

木曾 — 東信濃 — 依田城

(小栗郡依田村御嶽堂)

(途中木曾谷をはずれ、洗馬の宿で馬を洗った。)
洗馬の地名

信濃路 — 北国路 — 倶利伽羅峠

X 平家の中將維盛

火牛の策

この合戦で、義仲の命の恩人斎藤実盛は白髪を黒く染めて出陣、戦死。